

愛執婚

く内気な令嬢は身代わりの夫に恋をするく

プロローグ

「拓海！」

空港の出発ロビーに声が響く。行き交う人々は一瞬、足を止めて声の方をちらりと見る。しかしすぐ興味を失ったように各々の方向へと歩き出す。

そんな中ただ一人、そこに留まる人がいた。

「……美琴？」

遠く離れているから声は聞こえない。しかし終美琴には、彼の唇が自分を呼んだことが分かった。どんなに沢山の人がいても、彼が——九条拓海が人込みに紛れることはない。

拓海は、そこにいるだけで視線を集める。

美琴よりも頭一つ分以上高い身長。一見すらりとしていているけれど、実際はとても引き締まっている体。後ろへ緩やかになでつけた黒髪に、吸い込まれそうな瞳。すつと通った鼻筋、形の良い唇。

全てが完璧な比率で配置されている、奇跡のように美しい男。子供の頃から一緒にいた、四歳年上の幼馴染。

「どうしてこんなところに……今日は卒業式だろ？」

拓海は、制服姿の美琴を戸惑ったように見下ろす。彼の言う通り、今日は美琴の高校の卒業式だった。とはいえ小学校から大学までエスカレーター式の学校だから、メンバーはほとんど変わらない。特に感慨深くなることもなく、肅々と式を終えていつも通り帰宅した。しかし――

「お祖父様から、拓海が留学するって聞いたの。……今日の便でアメリカに発つって」
祖父から拓海の留学を聞かされた瞬間、美琴は鞆を投げ捨て家を飛び出した。祖父の制止する声
が後ろから聞こえたけれど、構わず送迎の車に飛び乗り、運転手に空港に向かうように頼んだ。
ここに来るまでのことは、ほとんど覚えていない。それほど夢中だったのだ。

空港で彼の後ろ姿を見つけた瞬間、美琴は心底安堵した。しかし振り返った彼の右手にスーツ
ケースを見つけてしまった今、その安堵感は消え去った。

目の前の光景は、彼がこれから旅立つことを告げている。

「留学なんて、嘘だよ。旅行に行くだけだよ。」

それでも信じたくない美琴は縋るように聞いた。しかし彼は、美琴が抱いた微かな希望を簡単に
砕く。

「重蔵様に聞いた通りだ。向こうの大学院で経営学を学ぶんだ」

「そんな……私、聞いてないよ……？」

何度も首を振る様は、まるで駄々をこねる子供のようだ。

普段の美琴なら、拓海の前でこんな醜態をさらすことは絶対になかっただろう。

美琴はずっと、大人になりたいと思っていたから。

四歳の年の差は大きい。拓海はいつだって美琴より大人で、落ち着いていて、隣に立った時の自
分の子供っぽさが嫌でたまらなかった。だからこそ早く大人になりたいと思っていたのだ。

そして今日、美琴は高校を卒業した。これで少しは拓海に近づけた……そう思っていた直後に
知ったまさかの留学に、「いやだ」と頭が、心が叫ぶ。

「こんなに大切なこと、どうして話してくれなかったの？」

「聞かれてないから。それに俺たちは赤の他人だ、別に話す必要はないだろ」

切り捨てて言い方に愕然とする。他人を見るような冷たい目を向けられるのは初めてだ。

「そんなことより、結婚する時期が正式に決まったって兄貴に聞いた。……四年後、お前が大学を
卒業したらすぐに籍を入れるんだ、って」

「それ、は――」

結婚。

その言葉に美琴の全身から血の気が引いていく。

(答えなきや)

頭では分かっているのに声が、言葉が出てこない。

拓海が話した通り、美琴は四年後に祖父の決めた婚約者と結婚する。そしてその相手は拓海では
ない。血の繋がった彼の兄、九条貴文だ。しかし拓海にとっては、美琴の結婚など他人事にすぎ
ないようだ。

(他人……?)

この時、美琴にある考えが過った。

美琴にとつて拓海は唯一無二の大好きな人だ。

(じゃあ、拓海にとつての私は?)

彼にとつて美琴は、兄の婚約者——他人にすぎないのか。

美琴が一方的に特別だと思っただけで、拓海にとつてはそれ以上でもそれ以下でもない。だから留学のことも話さなかった……その必要がなかったからだ。

心臓が嫌な音を立てた。反射的に目頭が熱くなる。

(泣いちゃだめ。泣いている場合じゃない)

緩みそうになる涙腺をなんとか堪えて、唇をきゅつと噛む。

「美琴」

拓海の口から次に続くだろう言葉を想像して、美琴は咄嗟に願った。

(お願い、言わないで)

どうか、それだけは。

「おめでとう」

拓海から聞きたくなかった、その言葉。

(「ありがとう」って、返さなきゃ)

なのに、喉の奥が張り付いて言葉が出ない。

好きな人に他の男性との結婚を祝われることが、こんなにも辛いなんて。

拓海は、美琴が自分を好きだなんて考えたこともないだろう。

彼が自分を女性として見ていないことは、初めから分かっていた。

彼は、美琴が拓海の兄の婚約者だから構ってくれていただけだ。それ以上の理由はない。可能性がゼロだからこそ、ひっそりと心の中で想うだけで良かった。

(……そう、思っていたのに)

想うだけでいいなんて、嘘だった。だって、「おめでとう」の一言で、こんなにも胸が痛くなる。

「兄貴なら必ずお前を幸せにしてくれる。……あの人は、本当に優しい人だから。俺を本当の弟の

ように扱ってくれた唯一の人だ」

凍りつく美琴に、拓海は淡々と告げる。

「何を言ってるの? 拓海と貴文さんは血の繋がった本当の兄弟じゃない」

「半分だけ、な。兄貴は正妻の子だけど、俺は愛人の子だ」

今にも儂く溶け消えてしまふような微笑に、胸が詰まる。

「もういいか? そろそろ行かないと乗り遅れる」

これ以上は時間の無駄だとばかりに拓海は背を向ける。美琴はその右手を咄嗟に掴んだ。

「待って!」

拓海は迷惑そうに眉を寄せる。その表情に心が折れそうになるけれど、手は放さなかった。今手放したら二度と会えない——そんな気がしたのだ。

「帰ってくるよね。留学が終わったら、日本に戻ってくるよね……?」

懇願にも近い声で聞く美琴に、拓海は言った。

「もう、会わない」

「え……？」

「お前の顔は、二度と見たくない」

衝撃で、声が出ない。

(行かないで)

(好きなの。初めて会った時から、拓海のことを好きだった！)

ずっと秘めていた気持ち。今まさに喉元まで出かかったそれは、ついぞ発せられることはなかった。

美琴にとつて拓海と彼の兄の貴文は、家族よりも近い存在だ。少なくとも美琴はそう思っていた。

しかし拓海は留学話を隠していたばかりか、美琴の顔も見たくないという。

(私は、そんなに嫌われていたの……?)

堪えていた涙が一気に溢れ出る。地獄に突き落とされたようだ。

シヨックと衝撃で言葉が出ない美琴は、掴んだ手を力なく離す。

自由になった拓海は今度こそ背中を向けた。

もう追いかけることは、できなかった。

美琴は止めどなく涙を流しながら、小さくなつていく背中を見送った。

I

旧財閥の流れを組む柊グループは金融や商事、重工業などあらゆる業界に展開しており、国内でも三指に入る巨大グループだ。

現在の柊家当主の名は、柊重蔵。

齢七十五にして柊家を統べる彼を、人は「財界の化け物」と呼ぶ。

美琴は、彼のたった一人の孫娘だ。

そして旧華族でもある柊家に昔から仕えているのが、九条家である。

時代の流れと共に二つの家の形は変わったけれど、今でも両家はとても近い関係にある。

実際、柊グループ傘下のいくつかの企業のトップには九条の名が連なっている。

九条家の現当主の名は、光田。彼には三人の息子がいた。

長男の貴文、次男の拓海、そして二人の兄と一回りも年の離れた、三男の礼。

この中で美琴の婚約者に選ばれたのは、貴文だった。

礼は美琴と年が離れすぎているし、妾腹の子である拓海は初めから選択肢になかった。

二人の婚約は、美琴が十三歳、貴文が十八歳の時に決められた。

柊家の孫娘と九条家の長男。年齢差も五歳でつり合いも取れている。

それに貴文は幼い頃から優秀だった。文武両道で全てにおいて優秀な貴文を重蔵は気に入っていた。

貴文が柀家に婿入りしても、九条家は三男の礼が継ぐから問題ない。むしろこの婚約によって、九条はいっそう柀と強い結びつきができると考えたのだ。

誰もが認める名門同士の婚約——その関係に転機が訪れたのは、美琴が大学三年生の二十一歳の時。

拓海と離れてから、三年が経過した頃だった。



その日は婚約以来恒例となっていた、月に一度の九条家訪問日だった。

いつも通り客室に通され、いつも通りお茶を飲みながら他愛のない話をする。

もう十年近くも同じことを繰り返してきた。昔と違うのは、その場に拓海がいないということだけ。

今日もまた普段通りの数時間を過ごすのだろう。

漠然とそう思っていた美琴は、婚約者の口から発せられた言葉に耳を疑った。

「好きな人ができた。だから君とは結婚できない。……本当にごめん、美琴」

貴文は、秘書の女性が好きなこと、これからの人生を彼女と生きていきたいこと、そして、その

ためなら全てを捨てる覚悟があることを、言葉を選びながらも美琴に伝える。

「秘書って……水谷藍子さんのこと？」

貴文は小さく頷いた。彼女のことは、美琴も知っている。貴文と一緒にいる時に何度か顔を合わせた程度だが、すらりとした長身とショートカットが印象的ないかにも仕事ができそうな女性だった。

でもまさか、二人が仕事以上の関係だったなんて——

「……いつから、彼女のことを？」

「一年前、彼女が僕の秘書になった時から。……今思えば、一目惚れだったのかもしれない」

若くして柀グループの傘下である柀商事の専務を務める貴文は、昔から女性たちの憧れの的だった。

名だたる企業の社長令嬢やモデル、果ては自社の受付嬢。

彼女たちはいずれもずば抜けた美人で、自信に満ち溢れた女性たちだった。しかし貴文には美琴という婚約者がいたし、何より過度に「女」をアピールする彼女らになびくことはなかった。

「でも、藍子はそれまで知り合ったどんな女性とも違ったんだ」

凛と伸びた背筋に化粧つきの顔のない、しかし端正な顔立ち。

まっすぐに貴文を見つめる瞳には邪なものなんてまるでない。幼い頃に両親を失った彼女は、バイト代と奨学金で大学に進学。更には自力で柀商事に入社し、今日まで仕事一筋で生きてきたという。

もちろん貴文に言い寄ることはなく、全く男として興味を持たれていない。それがなぜか無性に悔しくて、鉄仮面のような顔を笑わせたくて……気づけば毎日藍子のことを考えている。そして自惚れでなければ、藍子もまた同じ気持ちでいてくれると思うのだ、と。

「……まだ、彼女には貴文さんの気持ちを伝えていないの？」

「まずは美琴に全てを話してからだと思っただけから、君以外の誰にも言っていない。道に外れたことをしている分、せめて筋だけは通さない……と思っただけだ。勝手なことを言って本当に申し訳ないと思ってる。でも……美琴、お願いだ。僕との婚約を、解消してほしい」

深々と頭を垂れる姿は、断罪を待つ咎人のようだ。

この場合、突然婚約破棄を申し渡された婚約者として正しい対応はなんだろう。

絶対に嫌だと涙ながらに訴える、許さないとお茶をひっかけ……しかし美琴が選んだのは、そのどれでもなかった。

「貴文さん、頭を上げて」

ゆつくりと顔を上げた彼に、美琴は静かに問う。

「婚約破棄をした後はどうするつもりなの？ 私一人が頷いても、周りはずっとそうじゃない」

「そうだね。多分、誰一人として許してはくれないと思う。でも僕は何を失っても、彼女が欲しいんだ」

勘当されても構わない。そのためなら駆け落ちする覚悟もあるのだと、貴文は言った。

「……そんなに上手くいくかしら」

美琴の言葉に、貴文は眉根を寄せる。

「駆け落ちをするといっても、どこから情報が漏れるか分からない。そうなったら多分、お祖父様はあなたたちを絶対に許さない。藍子さんと別れさせるためなら、どんな手だって使うはず」

「たとえばどんなことがあっても、藍子は僕が守るよ。そのためにできる事なら何でもするつもりだ」

その一瞬、貴文の瞳がぎらりと光る。それは、温かな彼が見せる初めての表情だった。美琴は威圧されつつ、なおも聞く。

「九条でなくなつたあなたに藍子さんが守れるの？ もし婚約破棄をしたなら、あなたが相手にするのは私のお祖父様——柊重蔵よ」

美琴の指摘に貴文は言葉に詰まる。その表情は痛いところを突かれた、と言わんばかりだ。

「それは……」

「貴文さんがとても優秀なのは私も知ってます。それでも難しいことあると思うの」

だから、と美琴は言いきった。

「——私も、協力します」

目を見張る貴文に、美琴は続ける。

「私にできることなんて、あなたと藍子さんの関係を黙っていることくらいだと思っただけ……少なくとも、私からお祖父様に何かを言うことはありません」

貴文の戸惑いが手に取るように分かった。当然だ。他の女性と駆け落ちするのを手助けする婚約

者なんて聞いたことがない。困惑する貴文を前に美琴はふっと表情を和らげる。

「私のことを疑ってる？ 協力者のふりをして裏でお祖父様と繋がってるんじゃないか、って」

「それはない！ 美琴を疑ったことなんてないよ。でも、さすがにどう反応したらいいのかわからない。だって、協力するって……どうして？」

怒りをぶつけられるならまだしも、協力を申し出るなんて思いもしなかったに違いない。それでも……

（私には、協力する理由がある）

ふと美琴の頭に浮かんだのは、三年前に別れた大好きな人だった。

「もしも好きな人がいて、相手も自分を想ってくれるのなら……その手は絶対、離しちゃだめだと思っから」

美琴は最後まで拓海に好きだと言えなかった。

それまでだって、「拓海が自分を好きになることはない」と思い、気持ちを伝えることはしなかったのだ。

（それだけじゃない）

貴文は誰もが認める完璧な青年だ。容姿、人柄、生まれ。非の打ちどころがない貴文に周囲は期待を寄せる。その筆頭が、彼の母親である九条倫子だ。

倫子は、貴文が愛人の子に負けないように、常に貴文が完璧であることを望んだ。そして貴文もまた、その期待に必死に応えてきたのだ。しかし彼が人知れず思い悩んでいたことを美琴は知っ

ている。

九条家に生まれた重責。母を始めとした周囲からの過度な期待。それらを一身に受け止めてきた貴文が初めて自ら望んだのが、一人の女性だというならば……美琴は、それを応援したい。

「美琴……君も、好きな人がいるの？」

貴文の問いに、美琴は頷いた。

「僕の知っている人？」

「……ごめんなさい。それは、聞かないで」

「君は、その人と——」

「何もないわ。ただ私が一方的に好きだっただけ。だから、貴文さんは私に謝る必要なんてないの」

貴文が藍子と出会わなければ、美琴は拓海のことを黙ったまま結婚していただろう。

そんな自分が、貴文の謝罪を受ける資格なんてないのだ。

「貴文さん。あなたと藍子さんが一緒にいるために、私にも協力させて？ これはあなたたちのためじゃなく、私のためでもあるの」

「君のため？」

「私はもうその人には会えないけど……気持ちを伝えなかったことを、今でも後悔してる」

拓海が日本を発つてから、何度も考えた。

もしも美琴が「好き」と伝えていたら、結果は今と違っていただろうか、と。

何も変わらないのかもしれない。しかし胸の奥にしこりのようにある「伝えなかった」という後悔はなかっただろう。

「私は黙って諦めてしまったけど、貴文さんは違うでしょ？ あなたは行動に移そうとしている。なら、上手くいってほしい。だって私は、貴文さんのことが好きなんだから」

息を呑む貴文に、美琴は微笑む。

それは拓海に対する恋心とは違う、幼馴染おとこななじみとしての親愛だ。それでも美琴は確かに貴文が好きだった。時に兄のように、時に友人のように。

だからこそ、彼には幸せになってほしい。

好きな人と、一緒に。

「ありがとう、美琴。……協力、してくれるかな？」

美琴はしっかりと頷いた。

「喜んで、貴文さん」

そして、一年後。

二十二歳になった美琴は、四年前に拓海を見送った時と同じ空港にいた。

あの日と違うのは、見送る相手が拓海の兄・貴文であることだ。

婚約破棄の申し出から一年。美琴は二人の駆け落ちのために微力ながらも協力してきた。

協力といっても、貴文と藍子と一緒にいるための口実になったり、場所を提供したり……とささ

やかなことばかりだったが、それも今日までのこと。

これから、貴文と藍子は駆け落ちをする。

表向きは、海外出張に向かう社長と秘書、そしてそれを見送る婚約者だ。しかし貴文が予定通り帰国することはない。

彼と藍子は、今後の人生の拠点を海外に選んだ。

国内での格グループの影響力は侮れないあなだ。それは海外でも同じことだが、国内に比べれば格段に見つかる可能性は低くなるからだ。それ以上のことは、美琴は知らない。

今日の美琴の役割は、貴文と藍子を見送り「二人は確かに出国した」と証言することだ。

「ありがとう、美琴」

微笑む貴文の隣には、そっと寄り添う一人の女性がいる。はつきりとした顔立ちのショートカットの彼女の名前は、水谷藍子。貴文の秘書で、恋人だ。

「美琴さん、なんて言えばいいのか……ごめんなさい」

「頭を上げて、藍子さん。あなたは謝るようなことは何もしてない。これは全部、私がやりたくてしたことなの」

美琴の言葉に、藍子はゆっくりと顔を上げる。彼女は「ありがとうございます」と囁くささやくように言っ、今一度深く頭を垂れた。謝罪ではなくお礼のそれを、美琴は今度は笑顔で受け入れる。

傍らかたわらの貴文は、頭を上げた藍子の髪の毛を優しく撫でた。藍子はどこか恥ずかしそうに貴文を見返す。見つめ合う二人の姿は、互いを想い合う恋人そのものだ。

「お祖父様については大丈夫。ちゃんとあなたたちは出国したって証言するわ。さあ行つて」
美琴が促すと、拓海は藍子から手を離して、そっと美琴の両手に自分の手を重ねた。

「美琴。こういう形にはなつたけど……僕は、君と出会えて本当に良かったと思つてる。本当の妹のように、君のことを大切に想つてるよ」

「ありがとう、貴文さん。……実は私も、兄がいたらこんな感じかなって、ずっと思つてたの」
美琴はかつての婚約者の手を握り返すと、あえて悪戯っぽく笑いかけた。

もしかしたら、貴文と会うのは今日が最後かもしれない。
そう思うと寂しいけれど、胸の痛みはない。

美琴は確かに彼が好きだった。しかしその好意は親愛であり、貴文もまた同じだっただろう。
幼馴染としての情で、愛ではないのは間違いない。

なぜなら美琴は、知っているから。

胸が焼け付くほどの激しい感情を。名前を呼ばただけで泣きたくなくなるくらい幸せになることを。
そして美琴がそんな感情を抱いた相手は、後にも先にも一人だけなのだから。

「さようなら、貴文さん、藍子さん。……幸せになつてね」

しっかりと頷いた貴文と藍子は、最後に美琴にもう一度礼を言うと歩き始める。
大勢の人が行き交うロビーの中に、手を繋いだ二人の姿が消えていく。

(拓海)

遠ざかる二人の背中に重なつたのは、四年前、涙で見送つた拓海の姿だった。

拓海は自身の言葉通り、あの日以来一度も帰国していない。

以前貴文に聞いたところによると、アメリカの大学院でMBAを取得した彼は、その後会社を立ち上げたらしい。しかしその会社が軌道に乗り始めた矢先、突然退社してフォトグラファーに転職したという。

『景色を撮っているらしいよ。世界中あっちこちを飛び回っているみたいだ。日本じゃまだあまり知られてないけど、たまに個展を開いているようだし、海外ではそこそ有名みたいだね』

貴文にそれを聞いた時、美琴は驚いたけれど意外ではなかった。

拓海の趣味が写真であるのは知っていた。何よりも美琴は、彼の撮る写真が好きだったのだ。
もし、いつか再会することがあれば。

あなたが好きでした、そう伝えることくらいは許されるだろうか。

若い頃の笑い話として打ち明けてもいいだろうか。

(きつと、迷惑だろうな)

二度と会いたくないとまで言われたのだ。そんな相手に「好きだ」なんて言われても、困惑するだけだろう。それにもしかしたら今頃、恋人がいるかもしれない。

年齢を考えたら結婚していてもおかしくはないのだ。

拓海が、結婚。

今まで何度か想像したことがあるが、そのたびに胸が痛くなって、自分の心が未だ拓海にあるのを実感する。

こんなにも引きずるなら気持ちを伝えれば良かったのに。
可能性がないから、拓海が優しいのは貴文の婚約者だから……と何もしなかったのは、美琴自身。
(私も、好きって言えば良かったのかな)

遠い異国の地にいる人を想う。
彼に嫌われているなんて知らなかった。初めからそうだったのか、何かをきっかけに嫌ったのかも分からない。そしてそれを知る機会は今後もないのだろう。

それでもなお望むのは、ただ一つ。

(……あなたに、会いたい)

II

三カ月後の六月初旬。

「みこと先生、次はこれ読んで！」

小さな体で絵本を大切そうに持ってきた子供に、エプロン姿の美琴は「はいはい」と笑顔で答える。

「宗太君はこの絵本が本当に好きだねえ。でももうお昼寝の時間だよ？」

これを読んだら眠ろうね、と促すと、宗太は「うん」と元氣いっぱいにならずいた。

子供の無邪気な笑顔を見ると、美琴の方も自然と表情が柔らかくなる。

(この様子だと、まだまだ眠りそうにないなあ)

内心苦笑しながらも、美琴は膝の上に宗太を乗せて、ゆっくりと絵本を読み始めたのだった。

ここは、涼風学園。

終グループ傘下の財団法人が運営している、民間の児童養護施設だ。

この四月から、美琴は週に三日ほど契約職員としてここで働いている。

勤務時間は、午前九時から午後三時までの六時間。主な担当は、宗太たちのいる三歳児だ。

本当は正職員としてフルタイムで働きたいのだけれど、とある事情でそれはできなかった。

(……やっと寝た)

結局、宗太は絵本を五冊読んだところで寝落ちした。

眠る宗太を起こさないように横抱きにすると、そっとお昼寝布団へと横たえる。

(可愛いなあ)

絵本を読んでいる途中、眠さを必死に堪えて目を擦る姿を思い出すと、つい笑みがこぼれる。

まだまだ幼さの残る寝顔が何とも愛らしい。起きている時はあまりの元気に疲れてしまうこともしばしばだが、それはそれでまた違った可愛さがある。

涼風学園に入所しているのは、何らかの事情により親と一緒に暮らすことができない子供たちだ。一方、職員である大人たちの人数はどうしても限られる。全員を我が子のように目を配るのは難しい。それでもできる限り子供たち一人一人に寄り添うように、というのがここで働く上で必要な

ことだった。美琴にそれを教えてくれたのは、この園長である山城百合子だ。

六十代半ばの彼女を子供たちは皆、実の祖母のように慕っていた。

「美琴さん」

子供たちの様子を見つつ散らばっていた玩具を片付けていた時だった。部屋の扉が少しだけ開いて、百合子が顔を覗かせた。

「ちよつと来てくれるかしら」

「はい」

ちらりと時計を見るとまだ午後二時。退勤するにはまだ早い。美琴は不思議に思いながらも同僚の職員にそつと声掛けをして、廊下へと出る。

「突然ごめんなさいね。さつき、あなたのご実家から連絡があつたの。今から迎えを寄こすから帰る準備をしておくようにって」

急な話に美琴は目を丸くする。しかし今は仕事中。自分だけの都合で帰るわけにはいかない。

「まだ退勤時間まで一時間ありますし、三時に来るように連絡してみますね」

しかし百合子は困惑した表情で首を横に振る。

「残りの時間は代わりの先生にお願いしたから大丈夫よ。今日のところは帰った方がいいわ。その……電話してきたのは、あなたのお祖父様の秘書の方なの。だから……ね？」

含みを持たせた言い方に美琴はハツとする。美琴の祖父、すなわち柘重蔵は涼風学園の経営母体のトップだ。

百合子は園長として、そんな人物の意向を無視するわけにはいかないのだろう。直接涼風学園の運営に携わっていないとはいえず、重蔵なら傘下の施設の一つや二つどうにでもできるのだから。

そして重蔵に逆らえないのは、美琴も一緒だった。

「……ご迷惑をおかけしてすみません」

謝罪すると、百合子は「いいのよ」と笑顔で首を振る。

「本首を言えばフルタイムで働いてほしいところだけど……こればかりは、あなたの立場を考えれば仕方ないものね。美琴さん、あまり気に病まないでね。子供たちはあなたの笑顔が好きなんだから。もちろん、私もね」

百合子は慰めるように美琴の肩をぼん、と叩く。それに美琴はもう一度頭を下げたのだった。

「……急に迎えに来るなんて、何かあつたのかな」

職員用のロッカーで着替えながらも、美琴の胸はざわめいていた。

涼風学園で働き始めてまだ三カ月だけれど、こんなことは初めてだ。

ここで美琴が柘家の令嬢であることを知るのには、ごく一部の人間だけ。プライベートはともかく、通勤はもっぱら電車とバスを利用しているから、迎えが来たことなんて一度もない。

柘重蔵の孫であること。

それが、美琴がフルタイムで働けない理由だ。

重蔵は美琴が外で働くことを快く思っていない。

美琴はこの春大学を卒業したばかり。予定では美琴の卒業と同時に貴文が柊に婿入りし、美琴は家庭に入って柊商事の新社長となった貴文を支えることになっていた。

重蔵の計画通りに進んでいれば、六月の今頃は新婚旅行の真っ最中だっただろう。

しかし、それは全て露と消えた。

貴文が駆け落ちしたからだ。

この出来事に重蔵は烈火の如く怒り狂った。

自らの面子を潰された怒り。目をかけていた者に裏切られた屈辱。重蔵の命を受けた柊の人間が血眼になって貴文を捜したけれど、彼の行方は三カ月経った今も分からない。

美琴はそのことに安堵する一方、恐ろしくもあった。もしも、美琴が駆け落ちの共犯者だと重蔵に知られたら……その時のことを想像すると、芯から凍えるような気分になる。

ともあれ、結果として美琴の婚約は破談となった。

重蔵は、美琴が直接経営に携わることを望んでいない。しかしいくら柊商事の令嬢とはいえ、二十三歳で無職なのはどうしても嫌だった。

そこで美琴は、大学で幼児教育学を学んでいた時に得た保育士の資格を活かして働きたいと思ったのだ。

もともと子供好きではあったし、涼風学園は大学時代にボランティアで通っていた場所でもある。この時の経験を通じて、美琴は様々な事情で親とられない子供たちがいることを知った。

自分にも何かできることはないだろうか。

そう考えた結果が、寄付だった。

これは百合子しか知らないことだが、実は美琴は涼風学園の母体である財団の役員に名を連ねている。役員と言っても名ばかりで、運営は有能な人間が行っているのだが、柊グループの株を多数所有している美琴は、配当金の大半を寄付に回していた。

なんの取り柄もない自分にできるせめてものが、それだったのだ。

その繋がりもあり、百合子は美琴がここで働くことを快く受け入れてくれた。唯一難色を示したのが重蔵だったが、交渉の結果、週に三日働く契約職員になることを認めたのだ。

ここで働いている時は、美琴は素でいられる。

子供たちと向き合っている時だけは、柊グループの令嬢ではなく、ただの美琴でいられるのだ。「柊さん！」

帰り支度を整えた美琴が駐車場に着いた時だった。一台の軽自動車から男性が降りてくる。

「山本先生、お疲れ様です」

「お疲れ様です。早退するって園長から聞きました。体調、崩しちゃいました？」

「いいえ、家の事情で早退することになって……もしかして代わりの先生って……」

僕ですよ、と山本はあっさりと答える。美琴は「すみません」とすぐに頭を下げた。

「突然でご迷惑をおかけしましたよね」

「お気になさらず。柊さんのお役に立てるなら、これくらいなんてことないです」

意味深な言葉に、美琴は首を傾げる。すると山本は、「しまった」と言わんばかりの表情をした。

「えっと、今は……なんでもありません、忘れてください」

どこか慌てた様子の山本に、美琴は内心気になりつつも「分かりました」と素直に答える。

「じゃあ、私はこれで。今日は本当にごめんなさい。後で何か埋め合わせをさせてくださいね」失礼します、と軽く一礼して背を向けようとした時だった。

「あのっ！ ……それじゃあ今度、二人で食事でも行きませんか？」

驚いて振り返ると、なぜか顔を赤くする山本と目が合った。

「えっと、その、埋め合わせを——」

「ああ、そういうことでしたら」

喜んで、と答えようとした時だった。黒塗りの高級車が駐車場に入ってきたのを見て、美琴は固まる。

「うわ……高そうな車」

隣の山本が驚いた声を出す。そんな二人の前で、車の窓がゆっくりと下がった。

「——美琴」

中から顔を出したのは柘重蔵。美琴の祖父である。重蔵は山本に一切目をやることなく孫を鋭く睨む。

「何をしている、早く乗れ」

「……はい」

返事をした美琴は、目を丸くする山本にもう一度礼を言うと、車に乗り込んだのだった。

「誰だ、あれは」

車が発進した直後、重蔵は短く問う。美琴は俯いたまま小さな声で答えた。

「職場の先輩です」

「随分、親しそうに見えたが？」

祖父が何を言いたいのか分からず、美琴はちらりと視線を上げる。しかし、隣に座る人物と目が合った瞬間、鋭い眼光に圧倒されて息を呑んだ。

七十五歳という高齢にもかかわらず、祖父の背中はやんと伸びている。座っているだけで息が詰まりそうなほどの存在感を放つ彼こそ、世界に名の知れた柘グループの頂点に立つ男である。

「二人きりでいったい何を話していた？」

「……いえ、大したことではありません」

美琴はごまかした。

食事に誘われたことは何となく言えなかった。すると祖父は不快そうに眉を寄せる。

「契約職員ならばと大目に見たが、やはり外で働くのは考え物だな。どうせ色目を使うのなら、あんな男ではなく貴文に使えば良かったものを」

「色目なんてっ……！！」

使っていない。第一そんな言い方は山本にも失礼だ。そう言いかけたが、重蔵の鋭い一瞥で言葉を呑み込んでしまう。

「それくらいしてでも、貴文を撃つづぎ止めておく必要があったと言っている。お前がもつとしっかりしていれば、秘書なんぞと逃げられることはなかったんだぞ。お前が不甲斐ないから今の状況になったと、本当に理解しているのか？」

心底呆れたような声が車内に響いた。

駆け落ちから三カ月経ってもなお、重蔵の怒りは解けていない。

裏を返せばそれは、貴文たちが見つかっていないということ。それ自体は嬉しいし、彼らへの協力を後悔したことはない。それでも、こうも何度も責められると心が折れそうになる。

こんな時、美琴が言える言葉は一つだけだ。

「……申し訳ありません」

謝罪すると少しは溜飲りゅういんが下がったのか、重蔵は「ふん」と鼻を鳴らす。

「次は、失敗してくれるなよ」

「次……？」

「今日の見合い相手のことだ」

「待ってください！ お見合いって……そんな話、聞いてません」

「今、言った。何か問題があるのか？」

突然すぎて言葉も出ない。呆然とする美琴を重蔵は冷ややかに見つめた。

「まさか、貴文以外とは結婚する気がないとは言わないだろうな。お前の婿が私の後を継ぐのは昔から決まっていたことだ。貴文がダメなら他の人間を用意するまでだ」

祖父が自分を道具としか見ていないことは、分かっていた。

貴文と婚約破棄した以上、いずれは誰かと結婚する必要があることも理解していた。

それでもこれは、あまりに急すぎる。

重蔵の口ぶりからすると、これは決定事項に近い。きつと形ばかりのお見合いで、既に婚約は成立しているも同然だろう。十三歳の時、貴文との婚約が決まった時と同じ。今の美琴にできるのは、黙って祖父の言葉に従うことだけ。拒否権は、初めから存在しない。

「……お相手は、どんな方ですか」

ならばせめて、事前に人となりくらは把握しておきたい。

しかし勇気を振り絞ったこの問いにも、重蔵は「会えば分かる」と素っ気なく返しただけだった。

「貴文には劣るだろうが、今後の株を任せる能力はある。どちらにしても、お前には過ぎた男だ」

これには、流石さすがに心が折れた。

美琴にとつては、今後の人生を左右する出来事なのに。

重蔵にとつては、会社のための一出来事でしかないのか。

(……嫌だ)

怖い、と本能的に思った。幼馴染わかなじみであり、婚約者として十年近くを過ごした貴文とは違う。

これから初めて顔を合わせる人間と結婚するなんて……そんなの、怖くないはずがない。

そしてそれ以上に、こんなにも不安で怖くて仕方ないのに、祖父に何一つ言い返せない自分が情けなくて、腹立たしい。

「もうすぐ店につく。今のうちに作り笑顔の練習でもしておけ。お前は顔しか取り柄がないんだ。せいぜい有効活用して少しでも気に入られるように努めろ。また逃げられないようにな。分かったなら、その暗い顔をなんとかしろ。——本当に、情けない」

ため息は、時に厳しい叱責よりも美琴の心を深く抉る。情けない。

みっともない。

……いったい何度、この言葉を聞いただろう。

幼い頃から言われ続ければ、自分がいかに凡庸な存在なのかを嫌でも自覚させられる。

臆病で、引つ込み思案。取り柄と言え少しい見た目がいいだけ。

日本人形のように真つ黒な髪は、重蔵が女の短髪を嫌うため幼い頃から背中まで伸ばしている。

扇形の眉毛に縁どられた大きな瞳。すつと通った鼻筋に桃色の唇。生まれつき肌があまり強くないせいで、美琴は子供の頃から色白だった。確かに街を歩けば声をかけられることがしょっちゅうある。

(でも、それだけ)

知らない人が声をかけてくれるのは、見た目がマシだから。

世間的にはハイクラスの男性が妙に優しくしてくるのは、柀家の娘だから。

美琴自身は、見た目以外にはなんの取り柄もない、つまらない女なのだから。

それからほどなくして、二人を乗せた車はある料亭に到着した。既にお見合い相手は到着しているという。部屋へと続く長廊下を女将に案内されている最中、重蔵は言った。

「お前は黙って私の隣に座っていればいい。余計なことは何も言わず愛想を振りまいておけ」

「……承知しました」

振り返りもしない祖父の背中を前に、美琴は思う。

目に見えない鎖で繋がれているようだ。

己の意思も持たずに黙って祖父に付き従う自分は、さながら犬のようだと思美琴は自嘲する。

否、飼犬のコーギーはしばしば「お前は頭がいいな」と祖父に褒められる。

一方の美琴は、生まれてこの方一度だって褒められたことがない。

もしかしたら祖父にとつての美琴は、飼犬以下の存在なのかもしれない。

柀家の娘として生まれてから今まで、命じられれば返事は「はい」の一択以外ありえなかった。

逆らったのは、貴文の駆け落ちに協力した一度だけ。少しでも迷う素振りを見せれば即座に厳しく叱責される。歯向かえば最後、身一つで家から追い出される。

たとえそれが、つい昨日まで家族として一つ屋根の下で暮らしていた者であったとしても、祖父は自分の意に沿わない者は容赦なく切り捨てるのだ。

……まるで、塵のように。

実際、美琴の母親がそうだった。

現在、柀家本家の屋敷に住んでいるのは、重蔵と美琴の二人だけだ。

父親は美琴が子供の頃、外に愛人を作ったことが原因で重蔵に勘当された。

母親は、美琴が十歳の時に重蔵によって柊家を追い出された。

美琴が生まれる前、母親はホステスをしていた。そこへ客として訪れた父親と恋に落ち、美琴を身ごもり結婚したのだ。しかし重蔵は、母親を最後まで柊家の人間とは認めなかった。

折り合いの悪い祖父と母親。

父親はそんな二人を初めは取り持っていたけれど、最後は疲れて外に女を作った。父親が帰らないようになると、重蔵の母親へのあたりはますます強くなって……ついに母は屋敷を出て行った。

その日は、激しい雷雨だった。

土砂降りの雨の中、鉄の門扉に追いつがって娘の名前を呼び続ける母の姿を、美琴は今でもはっきりと覚えている。美しかった母がボロ雑巾のような姿で泥水に膝をつき、やがて力なく去っていくのを、美琴は暖かな部屋の中で嗚咽を殺しながら見ていることしかできなかった。

そんな美琴の横で、祖父は『去り際まで醜い女だ』と吐き捨てるように言ったのだ。

『美琴。お前だけはあはなつてくれるなよ。お前は、柊家を継ぐことだけを考えている。この家はいずれお前の夫となる男に任せる。それまで、お前は黙って私の言うことに従っていればいい』重蔵が美琴に望んだのは、終の人間であることだけ。

跡継ぎの能力は初めからないと割り切り、優秀な人材と結婚させることだけを目的としたのだ。

「こちらでございます」

案内されたのは、離れの一室だった。

この向こう側に新しい婚約者がいる。こんな時も頭に浮かんだのは、やはり一人の男だった。

(拓海)

今こそ、あなたに会いたい。

どんな言葉でもいい。あなたの声が聞きたくて、たまらない。

そして、襖が開いた。堂々とした足取りで入室する重蔵の後ろを、俯いた美琴は幽鬼のように続く。すると、下座に座っていた男——この人がお見合い相手だろう——がゆっくりと立ち上がった。

「ご無沙汰しております、重蔵様」

その声に美琴は弾かれたように顔を上げた。

思考が止まる。一瞬にして凍り付いた美琴に気づかず、重蔵は小さく頷いた。

「久しいな」

次いで重蔵が呼んだ、その名前。

「拓海」

ずっと会いたいと思っていた、けれどももう二度と会うことはないだろうと思っていた人。

(うそ)

九条拓海が、そこにいた。

初めは、拓海に対する強い想いが見せた幻かと思った。

だって、ここに拓海がいるなんてありえない。しかし美琴の目の前にいるのは間違いない本人だ。

最後に別れた時より随分と大人びているけれど、彼を見間違はずがない。離れの和室に三人。重蔵が上座に腰を下ろすと、美琴は混乱したままその隣に正座する。一方拓海は、美琴に視線を向けることなく重蔵を真っ直ぐ見据えた。

「こうして会うのは四年ぶりか。息災にしていたか」

「おかげさまで。重蔵様もお元氣そうで安心いたしました」

「何が元氣なものか。お前の兄のせいで心が休まらない毎日をご過ごしているというのに」

「それは……」

「ふん、まあいい」

美琴の知る限り、二人はこんな風に会話をするような仲ではなかった。

重蔵は拓海を忌み嫌っていた。時に塵のように見下し、時に空気のようには見ないふりをした。

拓海もまた、そんな重蔵を快くは思っていなかったはずだ。

「あちらで起業したと聞いたぞ。業績もなかなかのものだったようだが……それが、なんだ？ 会社を辞めて写真家などつまらん仕事をしていたそうだが、経営の勘は鈍っていないだろうな？」

「そのつもりです。重蔵様も、だからこそ私を呼び戻したものと思っていました」

「……言うようになりおって」

ここに来てようやく重蔵は美琴を見た。

「何をしている。お前も拓海に会うのは久しぶりだろう。挨拶くらいしないか」

そう言われてもすぐには言葉が出ない。その時、再会して初めて拓海が美琴を見る。

懐かしいその瞳にとくん、と胸が疼いた。

「美琴」

美琴の耳は一瞬にして拓海に集中した。

艶のある低く掠れた声。その形のよい唇が名前を呼ぶたびに心臓がきゅつとなった。

口数の少ない彼から話しかけてくることは滅多になくて、だからこそそんな彼に呼ばれると、ありきたりな自分の名前が特別なものに感じられた。

(名前を呼ばれた、だけなのに)

それだけで、美琴の胸は震える。

嬉しい。本物だ。本物の拓海が、ここにいる。

ずっとこの声が聞きたかった。二度と会えないと思っていたからか、最後に名前を呼ばれた四年前の別れの日を何度も夢に見た。

会いたい。声が聞きたい……その願いが叶ったのに、美琴は返事すらまともにできない。

固まる美琴を現実に戻したのは、祖父の冷ややかな声だった。

「お前は挨拶もまともにできないのか」

祖父の機嫌を損ねるのは怖い。しかし驚きと戸惑いで声が出ない。

申し訳ありません——そう、体に染みついた言葉をなんとか発しようとした時、助け舟を出してくれたのは、意外にも拓海だった。

「重蔵様、私も美琴もこうして会うのは四年ぶりです。こういった形で再会するとは互いに予想外

でしたし、つもる話もあります。よろしければ、二人だけで話す時間をいただけませんか？」

その申し出に重蔵は僅かに眉を寄せると、拓海を鋭く見た。

「一応、確認しておこう。このまま話を進めても構わないな？」

「もちろんです」

「ならいい。気のすむまで話すといい。今日の席は形だけのものだ。これ以上私がここにいる必要もないからな。私は先に失礼するとしよう」

「ありがとうございます。美琴は私の車で送ります」

重蔵は興味を失ったように立ち上がる。まさか、本当にこのまま二人きりするつもりなのか。

状況が把握できていない今、それは困る。美琴が重蔵を咄嗟に呼び止めようとしたその時だった。

「……分かつているな」

重蔵は美琴の耳元で囁いた。

「失敗は、許さん」

今一度念を押して、重蔵は出て行った。

失敗。それはつまり、婚約者の機嫌を損ねるなどということだ。そして今ここにいるのは、美琴と拓海の二人きり。必然的に美琴の新しい婚約者は拓海ということになる。

(そんなはず、ない)

新しい婚約者は美琴には過ぎた男だと重蔵は言った。確かに拓海は、その容姿も頭の良さも全てが美琴にはもったいなさすぎる男だろう。でもこんなことはありえない。だって拓海は写真家とし

て成功を収めているのだ。なのに、なぜここに——？

「……久しぶりだな、美琴」

俯いて頭を抱えそうになったその時、低く掠れた声に呼ばれる。はっと顔を上げると、拓海と目が合った。重蔵に対する時とは打って変わって、拓海の表情に笑顔はない。

「四年ぶりか。元気にしてたか？」

「……うん。拓海は？」

「見ての通り変わらないよ」

久しぶりの会話は、それだった。

二人は漆塗りの座卓を挟んで向かい合わせに座り直す。しかし、対面したのはいいものの、拓海は何を言うでもなくじっと美琴を見つめるばかり。互いを探るような雰囲気は美琴は戸惑った。

自分に向けられた拓海の視線が熱い。でも美琴が顔を背けることはなかった。

美琴もまた、拓海から目を離すことができなかつたのだ。

拓海は自身を「変わらない」と言っただけで、そんなことはない。

(……拓海、ますます格好良くなった)

初めて出会ったのは十年前。美琴が十三歳、拓海が十七歳の時だった。

柔らかな雰囲気を持つ貴文とは正反対の、まるで抜身の剣のような鋭さと冷たさを持った青年。

そんな彼に、美琴は一目で魅入られた。

あの頃の四歳差は大きい。当時の美琴は中学に入学したばかりで、まだまだ制服に着られている

ような子供だった。でも拓海は違った。高校二年生の彼はその時からずば抜けて格好良くて、大人びていた。それでも四年前はまだ学生らしさが残っていたが、今日の前にいる拓海は違う。

色気を纏った彼は、大人の男だ。

互いが切り出すきつかけを探るかのように見つめ合ったまま、沈黙が満ちる。
しかしそれは決して嫌なものではなく、どこか懐かしい。

昔から拓海は多弁な方ではなかった。彼が腹を抱えて笑うところを美琴は見たことがない。かといって特別寡黙なわけでもなく、楽しければ笑うし面白くないことがあれば不機嫌になったりもした。けれどどんな時も拓海は落ち着いていた。

耳に柔らかくなじむ声のトーンは、祖父とも貴文とも違う。

美琴は、彼の周りに流れる落ち着いた空気が好きだった。

「拓海」

沈黙を破ったのは、美琴だった。本当は、話したいことも聞きたいこともたくさんある。

なぜ四年前、あんなにも急に日本を発ったのか。いったいいつから美琴を嫌っていたのか……今も、嫌いなのか。でも今はそれらよりもまず、聞かなければならないことがある。

「どうして、拓海がここにいるの？」

美琴の問いに拓海は僅かに眉を寄せる。

「美琴は今日、なんて言われてここに来た？」

その懐かしい仕草に胸が疼きながらも、美琴は口を開いた。

「お見合いだ、って」

「その認識で間違いない。その見合い相手は、俺だ」

「……ごめんなさい、ちょっと待って」

眩暈がしそうになる。美琴が動揺していると、拓海は更に眉根を寄せた。

「本当に何も知らされていないのか。……あのクソジジイ」

拓海は口汚く吐き捨てる。先ほど重蔵の前で見せていた態度とはまるで違った。

「俺は、兄貴の代わりとしてここにいる」

息を呑む美琴に、拓海は淡々と続けた。

「ジジイが柙の跡継ぎに望む条件は、あらゆる面で『優秀』であることだ。学歴、生まれ、性格。どれをとっても文句がつけられないような人間。その点、兄貴は全ての条件に当てはまっていた。

九条家の長男で、優秀で、美琴と年齢も近い。だからジジイは兄貴をお前の婚約者にした」

しかし拓海は駆け落ちした。何もかもを捨てて、たった一人の女性を選んだのだ。

「まさか兄貴がそんな思い切ったことをするとは思わなかったよ。昔からあの人は、絵に描いたような優等生だったからな」

拓海は淡々と続ける。

「ジジイは兄貴と同条件の男を探したけど、そんな奴なかなか見つかるもんじゃない。そこで白羽の矢が立ったのが、俺だ。妾腹とはいえ、俺も九条の人間だからな。光臣がジジイに打診して、結果的に俺が選ばれた」

光臣。拓海と貴文の父親で、九条家の現当主だ。

「お祖父様が、拓海を……？」

「疑うのは分かる。ジジイは昔から俺が大嫌いだったからな。でも俺以上に条件が合う男がいなかったんだから仕方ない」

信じられないけれど、話は分かった。拓海がお見合い相手なのは間違いないだろう。だからと言って、拓海がこの話を受けるかは別の話。彼は、重蔵に頼まれてここにいるだけだ——そう考えた時、ふと先ほどの拓海と重蔵の会話を思い出す。

『このまま話を進めても構わないな？』

『もちろんです』

あの言い方はまるで、拓海が結婚を承諾したようだった。しかし頭に浮かんだ予想を美琴はすぐに打ち消す。

「……拓海は、この話を断ったんだよね？」

「さっき言った通り、俺は見合い相手として今日ここに来た。この話は既に決定事項と思ってもらっている。恨むなら、馬鹿な兄貴を恨んでくれ」

どうして。拓海は美琴が嫌いなはず。二度と顔を見たくないと、そう言ったのは彼自身なのに。

(私と拓海が、結婚……?)

ずっと好きだった人。

本当なら喜ぶべきことなのに——嬉しいと思えないのは、分からないことが多すぎるからだ。

「仕事は……？ 今は、フォトグラファアの仕事をしてるんだよね？」

一歩気になったのはそれだった。拓海は、写真家として活躍しているはずだ。世界中を飛び回って、ありとあらゆる景色を写すのが彼の仕事。こんなところにいるべき人ではない。それなのに、なぜ。

(まさか)

そういえば重蔵は、「写真家をしていた」と過去形で話してはいなかったか。

胸がざわめく。心臓が嫌な音を立てて早鐘を打ち始める。青ざめる美琴に、拓海は言った。

「フォトグラファアの仕事は、辞めた」

予感、的中した。

「どうして……辞める必要なんて、どこにも——」

「あったんだよ。それが、この結婚の条件だから」

「条件……？」

美琴は震える声で問う。

「お前との結婚は、終商事の社長になることを意味する。ジジイは終グループを背負う人間が二足の草鞋を履くなんて許せないだろう。『写真なんて下らん、趣味で十分だ』と言われたくらいだからな」

拓海の様子が陰る。それだけで彼にとって写真がいかに重要か分かった。

「……駄目だよ。拓海、写真が好きなんだよね？ 海外ではどんどん評価が上がってるって貴文さ

んに聞いたよ。それなのに辞めるなんて、そんな……」

「それはできない。一度引き受けたことを反故にしたら、ジジイは何をするか分からない。元いた会社の連中に迷惑がかかるようなことはしたくないんだ」

美琴ははつとした。もしも拓海が断った場合、重蔵は彼が勤めていた会社に圧力をかけるかもしれない。そうなれば、同僚や友人にも被害が及ぶ。だから、拓海は帰国した——？

(私のせいだ)

拓海も重蔵も、今回の責任は駆け落ちした貴文にあると思っている。

確かにそれは間違いではないだろう。しかし美琴が貴文に手を貸さなければ、駆け落ちの成功率は格段に下がったはず。つまり美琴は、彼らの共犯者だ。それが大好きな人の夢を奪うことに繋がるなんて……彼の周囲にまで影響を及ぼすなんて、思いもしなかったのだ。

「拓海」

震える声で好きな人の名前を呼ぶ。

「今からでも遅くない、この話は断って」

「……美琴？」

「お祖父様のことなら私が必要とかする。全部私のせいにして構わない。どんな理由を付けてもいい、私を悪者にしてもいい。だからお願い！」

たまらず美琴は声を荒らげた。美琴のせいで拓海が夢を諦めるなんて……意思を捻じ曲げられるなんて、そんなことは絶対にあってはならない。

「私からお祖父様に話すから……お願い、拓海」

重蔵に逆らう。そう想像しただけで身が竦むような思いがした。結果、どんな責めを受けるかは分からない。それでも構わなかった。拓海を巻き込んでしまうより、ずっといい。

(私、なんてことを)

拓海に対する申し訳なさから、じわりと目尻に涙が浮かぶ。

(……泣くな)

自分にそんな資格はないのだから、と美琴はすぐに目元を拭おうとする。すると、対面に座っていた拓海がすつと立ち上がり美琴の隣に移動し、その手を掴んだ。

「……泣くほど、俺のことが嫌いかな？」

「拓海？」

「兄貴は、お前を捨てて他の女を選んだ。それでもまだ、兄貴が好きなのかな？」

見下ろされた美琴ははつとする。拓海は、美琴が貴文を想って泣いていると勘違いしているのだ。それは違う、と言いかげようとするも、拓海の自嘲がそれを遮った。

「……好きになるのも当然か。兄貴は優しく優秀で誰からも好かれる。でも俺は、何もかもがあの人は正反対だ。お前が俺を苦手なものも仕方ないよな」

「苦手って……拓海のことをそんな風に思ったこと、一度もないよ」

「今更」

拓海はぞつとするほど冷たく吐き捨てる。

「俺と話す時のお前はいつも緊張していた。顔は笑っているのにどこかよそよそしい。俺を見る時はいつも伏し目がちだ。うまく隠していたつもりだろうけど、俺はずっと気づいてた」

俺以外は分からなかっただろうけどな、と拓海は唇を歪める。

（拓海の目には、そんな風に映っていたの……？）

緊張していたのは、ドキドキしていたから。つい目をそらしてしまったのは、拓海を見て赤らむ頬を隠したかったから。全部、拓海が好きだから。それ以上の理由なんてありはしないのに。

まさか拓海がそれを正反対の意味で捉えていたなんて、思いもしなかった。

「違うの、私は——」

「何が違う？」

その瞬間、空気が一変した。

今まで張り詰めていたそれは突如弾け、代わりに拓海の激しい怒気が空気を震わせる。誤解を解こうとする美琴の言葉を聞こうとせず、拓海は美琴の手首を握る手に力を込めた。

（怖い）

痛みで咄嗟に顔をしかめると、その拍子に堪えていた涙が美琴の頬を滑った。

「いいか。これは決まったことなんだ」

彼は挑むように美琴を見据えた。力強い瞳に射貫かれる。

「見る。お前と結婚するのは、俺だ」

「離して……」

美琴の懇願を拓海は無視した。それどころか自分の方に引き寄せようとする。

「いやっ！」

美琴は咄嗟に身を引いて体をよじる。その時、振り払った美琴の指先が拓海の頬をかすめた。

「っ……！」

拓海が顔を歪める。彼の頬に滲んだひつかき傷に、美琴は我に返った。すぐに謝ろうとするけれど、それよりも早く拓海の右手が美琴の顎を掴んで、くいと上げた。

「兄貴以外の男には、指一本だつて触られたくないか？」

「たく、み……」

「残念だったな。今こうしてお前に触れているのは兄貴じゃない、俺だ。どうしてもそれを受け入れられないというのなら、体に教えてやるよ。——余計なことなんて、もう何も言えないように」

「んっ……！」

美琴は目を見開いた。

拓海に、唇を塞がれたのだ。

突然のことに身動きできないでいると、拓海の舌が強引に美琴の唇をこじあけた。

抵抗する間もなかった。強引に割って入った舌は、奥に引込もうとする美琴の舌をたやすく撥めとる。舌裏を舐め上げて口の中を暴れ回るそれに、頭がくらくらした。

（どうして、こんなことするのっ……!?!）

婚約者だった貴文は、美琴の頬に触れることすらしなかった。美琴が知っているキスといえば、親愛を表すチークキスだけだ。しかし、これは違う。

美琴の何もかもを奪うかのような激しいキスに、どう反応したらいいのかわからない。逃げようと体をよじつても、拓海に腰をホルドされて動けない。できるのはただ、嵐のように突然訪れたキスに耐えるだけだ。

「ふっ……あ……」

美琴の口から吐息が漏れる。

（やだ、こんないやらしい声……）

声を抑えようと唇を引き結ぼうとしても、拓海は許さなかった。絡んで、舐められて、吸われて。くちゅくちゅという音に自らの声（みずか）が混じるのが、恥（は）ずかしくてたまらない。

「美琴」

じわりと目尻に浮かんだ涙を、拓海が舐めとる。不意に終わった口づけに、美琴の体から力が抜ける。その場に座り込みそうになるのを、拓海の逞（たくま）しい腕に支えられた。

咄（ど）嗟（さ）に「離（と）して」と言いかけて——言葉（ことば）を呑んだ。

（どうして、あなたがそんな目をするの）

美琴が見上げた先にある顔は、とても辛（辛い）そうだった。拓海は、先ほどまで暴れていた唇（くちびる）をきゅっと引き結び、何かに耐えるような表情（へいじょう）をして美琴を見下ろしている。

まるで泣（な）くのを堪（こ）えているような、その表情（へいじょう）。

「……やっど手に入れたんだ」

拓海は、美琴の視線から逃れるように、ぎゅっと美琴（みずか）を自（みずか）らの胸（むね）に抱きしめた。

「俺（おれ）は兄貴（にいさま）が持つているものも、これから先（さき）あの人（ひと）が得（と）るものも、本当（まこと）はずっと羨（うらや）ましくてたまらなかつた。それでも……絶対に手（て）に入（い）らないものを望（ねが）んでも虚（うそ）しいだけだと思って、諦（あきら）めていた」

「た、くみ……？」

戸惑（戸惑）う美琴（みずか）を拓海（たくみ）はいつそう強く抱きしめる。

「でも状況（じょうきょう）は変わった。もう諦（あきら）めたりなんかしない。——美琴（みずか）。俺（おれ）は、お前（まへ）と結（むす）婚（こん）して全（ま）てを手（て）に入（い）れる」

この瞬間（しゅんかん）、美琴（みずか）は悟（さと）った。

なぜ拓海（たくみ）が夢（ゆめ）を捨ててまで帰（かえ）国（こく）し、貴文（きぶん）の身代（みしろ）わりになつたのか。

なぜ美琴（みずか）が破談（はだん）を勧め（すす）めても、頑（こ）として受け入（い）れようとし（し）ないのか。

拓海（たくみ）は、終（つい）グルーブ（group）が欲（ほ）しいのだ。

だから、嫌（きら）いな美琴（みずか）とも結（むす）婚（こん）する。美琴（みずか）に拘（こ）っているのではない。

彼（かれ）が求（もと）めているのは、終（つい）における立（た）場（ば）だけ。

全（ま）てを理解（りかい）した美琴（みずか）の両目（りょうめ）から再び涙（なみだ）が滲（にじ）む。それが頬（ほ）を濡（ぬ）らすのを、美琴（みずか）は唇（くちびる）を噛（か）むこと（こと）でなんとか堪（こ）えた。美琴（みずか）を抱（か）きしめる拓海（たくみ）はそれに気（き）づかない。だから美琴（みずか）は、息（いき）を、声（こゑ）を殺（ころ）して泣（な）いた。

「……会（あ）わなければよかつた」

たまらず漏れた言葉に、拓海は一瞬体を強張こわばらせたが、すぐに抱く手に更に力を込めた。その力強さに、温かさに、いつそう切なさつが募る。

もう一度だけ会いたいと思った。誰かのものになる前に、一目姿を見たいと思った。でもそれは、こんな形じゃない。

いつかもう一度会えたら、「好き」と伝えられるだろうか——そんな風に思っていた、甘えた自分。

でも、言えるはずない。

好き。そのたった二文字を、美琴は永遠に口にする機会を失った。

なぜなら美琴は、拓海の夢を奪った張本人なのだから。

「諦める、美琴」

まるで自らみずかに言い聞かせるように、拓海は言った。

「もう二度と離さない。——お前は、俺の物だ」

III

相馬拓海、十四歳。

その日、拓海はたった一人の家族である母親を見送った。

突然の病死だった。

母親は心の弱い人だったけれど、小さいながらも小料理屋を営いとなみ、女手一つで拓海を育ててくれた。父親はいない。拓海の母親は、いわゆる愛人だったのだ。

血縁上の父親にあたる男は、母が身ごもったことを知ると二度と会いに来ることはなかった。一方で男は拓海を認知した。月々の養育費の振り込みが滞とどまることがなかったのは、不幸中の幸いと言えるかもしれない。

通帳に数字が刻まれる時だけ思い出す父親。特に会いたいと思ったことはないし、これからも会うつもりなんてなかった。しかし母の葬儀を密やかに終えたその夜、男はなんの前触れもなく訪れた。

「相馬拓海だな？ 私は九条光臣。お前の父親だ」

土砂降りの夜だった。父親を名乗る男は、お付きの人間に傘を持たせて自らみずかは一滴も濡れることなく拓海を見下ろした。

嫌な男だ。一目見てそう思った。

冷やかな視線に威圧的なオーラ。何よりも人を見下すその態度が、気に食わない。

「……あまり母親に似ていないな」

男はいつそ呆れるほどに淡々としていた。年齢は四十代半ば頃。その顔は恐ろしく整っているのに、無表情のせいとか何の感情も読み取れない。しかしそれは、相対する拓海もまた同じだった。

「そうだろうな。母さん曰く、俺はあんたに生き写しらしいから」